

論文

「文化主体性論」の再考

——ケニア・ナイロビ市におけるスラムツーリズムの展開を事例に——

八木 達 祐*

I はじめに

1990年代以降、スラムツアー (slum tour) と総称される都市スラムの見学ツアーがアフリカ・南アメリカ・アジア地域を中心に拡大している [Steinbrink et al. 2012: 1]。スラムツアーは主として、スラム事情に精通したガイドによる案内のもとでバスや自転車、徒歩の移動手段を用いて [Steinbrink et al. 2012: 1]、スラム地域内の各所—民家や学校、居酒屋や土産物屋、NGO 団体の活動場所など—を観てまわるものであり、観光者がスラムという場所を体験的に理解する内容となっている。

スラムツーリズムが各地で拡大する背景には、マストツーリズムの発展によって生じる観光地域の文化や自然環境への大きな弊害を回避することを目的したオルタナティブツーリズムの台頭がある。スラムツーリズムは、大きな資本や特別な技術、専門知識がなくても「未開発故の特徴」や「民族文化」を活かした導入が可能である [森本 2012: 10] ことや経済の活性化や貧困削減のポテンシャルを持ったプロブアーツーリズムとして展開できる [Steinbrink et al. 2012: 9、高寺 2004] ことから、急速な拡大を遂げた。

またスラムツアーには、NGO を主体としたものもあり、スラムの環境衛生 (生活環境)・スラム文化・社会的弱者にかんする理解を通じた社会的／教育的意義によっても展開している。たとえば、文化人類学者の内藤順子は、チリのサンチャゴ市における貧困問題の解決を目指すスラム観光プロジェクトを事例に、スラムツアーは「雇用創出」や「貧困削減」に加え、「ゲストがスラムの生活現場を知ることを通して相互理解 (社会調和) へむかう」という意味で [内藤 2015: 199] 注目されたと説明している。実際観光人類学者の須永和博は、大阪・釜ヶ崎のスタディーツアーを事例に、観光者が参加後には異質な「他者化」といった現地イメージからは解放され、釜ヶ崎の人々を「地続きの」存在としてみるようになる可能性を示している [須永 2016]。

しかし拡大の裏側では、メディアを中心にスラム住民の生活が見世物にされることや貧困が商品化されることの倫理性にかんする批判がしばしばとりあげられてきた [Steinbrink et al. 2012: 1] ¹。スラムツーリズムの議論以前からも途上国における観光化をめぐるのは、先進国によるインフラ整備を目的とした進出や先進国の観光者による一方的な訪問に途上国の観光地の人々が奉仕を続けるといった従属的な構造がある [Nash 1989] として、新植民地主義であるとの批判がなされてきた。

とりわけ本研究が対象とするアフリカ地域は、社会や経済の様々な側面における先進国の人々の進出が新植民地主義であると活発に議論されてきた地域でもある。たとえばアフリカ研究者の松田素二は、資源争いを遠因とする紛争が各地で終結し、今日 (2000年代)、豊富な天然資源や鉱物資源による経済成長のポテンシャルが注目されるようになったアフリカを「希望の大陸」としてまなざすことは、「かつてアフリカを植民地支配した心性 (アフリカ認識) とまったく同種同根のもの」と批判している [松田 2014: 6-7]。

観光社会学者のジョン・アーリは、観光者が観光地の人々に向ける視線であり社会的に構造化・組織化された「まなざし (gaze)」に着目し、そうしたまなざしが階級・ジェンダー・エスニシティなどの差異により生じることを指

キーワード：スラムツーリズム、観光人類学、文化主体性論、ガイド、インフォーマルセクター

* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2014年度入学 共生領域 日本学術振興会特別研究員(DC1)

摘しながら、観光者と観光地の人々との不均等な関係性を提示した [アーリ 1995]。後の改訂版 [アーリ 2014] では観光者と観光地の人々の間にあるまなざしの相互性や両者の関係の複雑性を説明している。ただ依然として、経済力をもつ先進国の観光者とスラムで暮らす地域住民との間の経済格差や先進国の観光者がスラム住民を観光消費の対象にするといった構図は解消されておらず、両者が対等な立場にあるかには疑問が残されたままである。このように考えると、歴史的に築かれた周縁性や貧困そのものを観光資源とした今日のスラムツアーは、先進国一途上国、観光者—観光地の人々間の不均等な関係性をより顕著に表出させる事例である、ともいえる。

スラムツーリズムにかんする研究が始まったのはごく近年であり、最初の学術会議も2010年12月にイギリスのブリストルで開催されたばかりである [Steinbrink et al. 2012: 8]。この学際的な会議における発表をまとめた論文集が2012年にRoutledgeから出版された、ファビアン・フレンゼル、コ・コーエンズ、マルタ・ステインブリック共編の「スラムツーリズム：貧困、権力、倫理 (Slum Tourism: Poverty, Power and Ethics)」である。彼らはスラムツアーに対する観光者の期待にかんする調査をもとに、「貧困」がスラムツアーの主要な魅力であることを指摘し、スラムツーリズムは貧困を見たいという観光者の欲望を背負った「貧困ツーリズム」して捉える必要があると述べる [Steinbrink et al. 2012: 9]。さらにスラムツアーには、スラムの生活環境を改善し貧困を消失することを目的としながら同時にそれらを商品として売り続けることで成立しているといった、パラドックスがあることを提示した [Steinbrink et al. 2012: 9]。ステインブリックたちは、このようなスラムツーリズム研究の主要な論点として、「権力」の問題を挙げる。彼らは貧困という状態の権力の無さではなく、貧困を見るという行為をいつでも問題視する倫理的批判の根底にある権力の問題を捉えようとする。つまり、観光者に対するスラム住民の権力のなさという構図がどの程度適切なものなのか [Steinbrink et al. 2012: 10] が現在のスラムツーリズム研究には問われているのである。

しかし従来のスラムツーリズム研究は、各地におけるスラムツアーの起源・導入・拡大の経緯 [Frenzel 2012] や開発・支援団体による観光開発プロジェクトの実践をめぐる議論 [内藤 2015]、観光を通じた観光者のイメージ変容からみる教育的可能性 [須永 2016]、などを明らかにしてきたが、スラム住民が生活世界の観光化にいかに向き合い対処しているのかについては十分に検討されてこなかった。つまりステインブリックたちが提示した「権力」をめぐる問いに、観光地の人々の対処の諸相から実証的に答える研究が不足してきた。

そこで本稿は、ケニアの首都ナイロビ市キベラ地区におけるスラムツアーを事例に、スラム住民でもあるガイドによる観光化への対処のありかたについて検討することを目的とした。さらに言えば、彼らの観光化への対処のありかたを示すことで、本稿では、先進国—途上国、観光者—観光地の人々間の不均等な関係性、すなわち権力関係の問題によって規定する視座によって、彼らの主体性を論じることが、逆説的に彼らの実践に対する理解を狭めうる危険性があることを指摘する。

第2節では、従来の観光人類学における「文化生成論」と「文化主体性論」の2つを紹介する。第3節ではスラムツアーをめぐる住民の主体性を論じる際に見て適切な後者を援用することの問題を、ケニア・ナイロビ市のスラムの場所性に注目して述べる。第4節と第5節では、キベラのスラムツアーの特徴とガイドたちの実践を「インフォーマル性」に着目しながら明らかにし、従来の「文化主体性論」を批判的に検討する。最後に、キベラのガイドたちによる観光化への対処を考察し、観光が内包する不均等な関係性にかんする問いへ立ち返る。

以下の考察は、2014年8月から9月の2週間と2015年9、10月の2ヶ月間、ナイロビ市キベラ地区で行ったフィールド調査から得たデータをもとにしている。2014年は参与観察の対象となるスラムツアーを選択するための予備調査として、まずはキベラ地区のツアーの概要をつかむために、2つのスラムツアーに純粋な観光者として参加した。1つめのツアーは日本人の知人を通じてナイロビの市街地に拠点をおく観光会社とコンタクトを取り、そこで紹介されたキベラ在住の現地ガイドに案内を受けた。2つめは日本で事前にインターネットでみつけた観光会社に現地で電話申し込みを行った。2015年はスラムツアーのガイド5名への聞き取り調査と観光化に対するガイドの実践を明らかにするための参与観察を実施した。2015年は、調査者であることを明かして3つのツアーでの参与観察を行った。参与観察したツアーはすべて調査助手(2014年に出会ったガイド)に紹介されたガイドによって実施されたものである。調査では英語を用いた。

Ⅱ 観光人類学における先行研究

1977年に出版されたバレーン・L. スミスによる『Hosts and Guests: The Anthropology of Tourism (観光・リゾート開発の人類学——ホスト&ゲスト論でみる地域文化の対応——)』は観光者を受け入れるホストと観光者のゲストとのかかわりを考察した人類学による最初の論文集である。その後の観光人類学において「観光地の人々への観光化の影響に関する研究」や「観光文化・伝統文化の創出と観光に関する研究」は観光客数や観光開発が増加する1990年前後からの主要なテーマとなっている〔江口 2011: 64-67〕。

須永はこの時期(1980年代後半から)の観光人類学の研究動向を整理するために、松田が人類学の動向を掴むために使った「文化生成論」と「文化主体性論」を次のように援用している〔須永 2012〕。

ポストモダン人類学やポストコロニアル人類学などと称される近年の人類学は、本質主義的な「文化」概念に対しては、境界を越境しあいながら異種混濁性が新たな文化像として提示されるようになった。また対象社会の人々を受動的な存在として描いてきたことに対しては、植民地主義やグローバルゼーションなどの侵入によって破壊され湾曲されたと思われてきた現地の文化が、実は権力作用の中にあっても巧みに交渉し、流用や読み替えなどによって文化を創造してきた、文化を創造し主導する主体として描くようになった。このような「ポストコロニアル転回」の中で生まれてきた二つの新たな語り口を、ここでは松田素二にならって、前者を「文化生成論」、後者を「文化主体性論」と呼ぶことにしたい〔松田 1999: 207-208〕。〔須永 2012: 73〕

観光の「文化生成論」については、たとえば、観光人類学者の山下晋司の議論を挙げることができる。山下は、インドネシアのバリ島の観光を事例に、観光化によってホストの「伝統文化」が破壊されるとする「消滅の語り口」を批判的に検討する〔山下 1999〕。彼は、ホストはむしろ観光との出会いにより、新たな文化的アイデンティティを獲得し、「クレオール文化」を創り出しているという〔山下 1999〕。このように観光における「文化生成論」とは「クレオール文化」のように「観光によって文化が破壊されるのではなく、むしろ観光を通じて新たに生成される文化にこそ着目すべきであると主張する」〔須永 2012〕ものである。

一方、観光の「文化主体性論」の主要な議論として、文化人類学者の太田好信の研究がある。太田は、「観光を力関係の行使として再定義すれば、研究課題として現れてくるのは文化変容ではなく、むしろ観光の対象となる社会に生活する人々が、観光という回避しがたい社会的な文脈のなかで、いかにして自己のアイデンティティをネゴシエートし構築するかという問題である」〔太田 2010: 71〕と述べて、文化とは選択や解釈の結果に存在するものであることを示す。彼は岩手県の『遠野物語』、北海道のアイヌ観光、沖縄の海人体験観光を事例に、ホストとゲストの間には不均衡な権力関係が存在するが、ホストには「文化を操作できる対象として新たにつくりあげる」〔太田 2010: 72〕「抵抗」実践が可能であることを指摘し、そのことを「文化の客体化」という概念を用いて説明する〔太田 2010〕。遠野にかんする記述部分において太田は、「一見、観光のイメージを一方的に担わされているように見受けられる遠野の人々も、そのようなイメージにそった「演技」をすることにより、そのイメージのもつ虚構性を主題化する。そのような操作をとおして、観光の力関係にからめとられながらも、なおかつその状況における自己の行為を意識することにより、その状況を中和する可能性を、遠野の人々は留保しているのではなかろうか」〔太田 2010: 78〕と述べる。

この太田の議論と類似した視座に立つ観光人類学者のバンテンは、アラスカの観光業に従事する先住民たちの対処の方法として、「商品化されたペルソナ」という概念を提示している〔Bunten 2008〕。アラスカの観光業に従事する先住民たちは、観光者の期待やまなざしによって自らの文化が商品化されることの危険に対して、あらかじめ「商品化されたペルソナ」という観光者と「共有する文化」を自ら主体的に操作をしている。商品化されたペルソナ論は、太田による観光の力関係の抗えなさに対する慎重な姿勢に比べてやや楽観的なきらいはあるが、バンデンもまた観光の力関係に絡めとられつつも、それをかわす一種の「抵抗」実践として住民の主体性を救い出そうとする視座を持っている。

このような「文化主体性論」は、観光による不均衡な力関係が最も直截的に表出しているようにみえるスラムツアー

における住民の対処を検討する上で、一見重視されてよい視座である。実際に「観光に対するスラム住民の権力のなさ」という構図を問い直す必要性を訴えるステインプリングらが念頭に置いているのも、スラム住民の主体性の再考だろう。だが「文化主体性論」でケニアのスラムツーリズムを論じるにはいくつかの問題がある。以下では、ケニアの観光史における自然観光や文化観光の舞台と、スラムツアーの舞台であるキベラ地区の特徴を対照させ、スラムという空間での観光化について検討したい。

Ⅲ スラムという場所性

本節では、ケニアの観光史の概要とケニアの首都ナイロビ市に位置するキベラ地区の形成史と特徴を紹介する。

1 自然／文化観光とスラムツアー

古村学はアフリカ観光研究の歴史的展開を世界的な観光の動向と関連させながら考察した論文において、東アフリカの観光（研究）の歴史を的確に示している [古村 2007]。ここではしばらく古村による東アフリカ全体の観光史からケニアの観光史にかかわる部分を抜き出し、その特徴を概観したい。

ケニアにおける観光の始まりは、第2次世界大戦前の1929年に当時イギリス領であった東アフリカへの商業航空の就航が決まったときに遡る。その後1948年に欧米からの集客を目的に設立された、東アフリカ諸国—ケニア、ウガンダ、タンガニーカ（現在のタンザニア）、ザンバジル（現在のタンザニア）によるEATTA（East African Tourist Travel Association）や1958年に設立されたケニア観光省が主導する形で観光立国としてのケニアの姿が現れ始めた。1963年にケニアは独立を果たし、植民地期に多くの白人入植者がいたことでインフラ整備が進んでいたため、1970年代には観光客数ならびに観光収入が東アフリカ諸国の中で最大の国になった。1973年の第一次オイルショックと1978年の第二次オイルショックの影響を受け1980年代初期までいったん観光産業は停滞を続けることになったが、それ以後は国際観光の拡大に伴いケニアの観光も成長していき、観光は主要産業となった。しかし、1992年の多党制導入による政治混乱や1998年のアメリカ大使館爆破テロの政治的影響を受け、観光客数は安定しなくなっていた [古村 2007: 1-10]。

観光立国ケニアを築いてきたのは、国立公園の野生動植物を回るサファリツアーと、海岸部と島嶼部のビーチリゾートである。古村によれば、両者は「現地社会とは切り離された安全かつ快適な空間のなかで成立」する観光である。たとえば、ビーチリゾートには「従業員以外の現地の人々は入り込むことができない」 [古村 2007: 12]。

これに対して、従来のサファリツアーやビーチリゾートなどのマスツーリズムに対するオルタナティブとした登場したスラムツアーはこれまでのケニアにおける観光とは性質が異なる。スラムツアーは、ケニアの現地社会、彼らの生活空間そのものが観光化の対象となる。ただし、この生活空間そのものが観光化するという特徴は、出稼ぎ民の集住地域であるスラムにおいては、やや複雑な意味合いをもつ。この点をより明確にするために、次にケニアにおけるスラムツアー導入の契機とツアーが展開するキベラ地区の形成史と特徴について述べる。

2 スラムツアーの導入とキベラ地区

フレンゼルによると、ケニアにおいてスラムツアーの契機となったのは2007年にナイロビで開かれた世界社会フォーラム（World Social Forum）である [Frenzel 2012]。世界社会フォーラムとは社会運動家やNGOが集う草の根の国際会議であるが、2007年1月にナイロビ支部はそのホストを担当し国際会議に関連したイベントによって2、3万人の観光者がナイロビに集まったという。その際、会議の主要な代表者たちの要求によってキベラ地区でのツアーが用意された。この会議を契機にキベラ以外のスラム地域も次々と「発見」されるようになる [Frenzel 2012]。

キベラは19世紀後半、宗主国イギリスと従属関係にあったエジプト人が連行した南スーダン人の奴隷の居住区として誕生し、独立直後の混乱期にキクユ人やルオ人の自称「地主」たちがバラック小屋を建て始め、それを出稼ぎ民に賃貸することでその規模を拡大したエリアである [松田 1996: 96]。1969年にケニア政府によって国有化宣言がなされた後も拡大を続けている [松田 1996: 99]。キベラは現在東アフリカ最大のスラムであり、100万人以上

が暮らしているとされる〔松田 2016:265〕が正確な統計がなく、スラムへの参入・退出も激しいため、正確な居住人口は不明確である。主な民族はルオ、キクユ、ルリア、ヌビアで、キベラには13の地区が存在している〔松田 2016:260〕。

スラムツアーに従事するガイドたちの実践を検討する上で、その舞台であるキベラ地区の重要な特徴として、少なくとも以下の3つがある。

第1に、居住人口の大部分が国内外から集まった「出稼ぎ民」であることである。これまでの観光人類学において、観光地の人々による観光化の対処が論じられる際に、観光地の人々として想定されているのは地元へ根づく地域住民であろう。それに対して、「出稼ぎ民」の集住地域であるキベラでは、先住民性は曖昧にされ多民族地域として発展している〔慶田 2012:84〕。また、松田はナイロビの出稼ぎ民たちによる「都市の生は仮、村の生は真」といった定型化された語り注目し、出稼ぎ民たちが都市の生活を「仮の生」とみなすことで、外来の制度や村での慣習から外れた暮らしを許容する、といった戦略的な象徴実践を説明している〔松田 1996:267-269〕。このようなキベラは、従来の観光人類学・社会学が主たる対象としてきた文化的資源により観光化された地域とは異なり、「相対的な貧困」という共通項はあっても異種混濁的な場であり、土地や文化に対する「われわれ性」があいまいな場である。つまり、固定的で所与の本質主義的な文化でないとしても文化主体性論は少なからず「われわれ」の文化といった意識を前提とするが、キベラでは「観光客に向けた／と共有しうる文化」とそうでない文化といった共通理解それ自体を設定しうるか否かがまずもって問われる場所である。

第2に、第1の点とも関係するが、異質な人々が流動的に行きかう不定形な空間であるキベラでは、「異質な他者」との遭遇は観光者に始まるものではない。現在ではキベラで生まれ育った若者も多数いるが、それでも文化や背景の異なる出稼ぎ民の流入が頻繁かつ継続的に生じている場所であることに変わりはなく、そこでは「一人一人の人間ではなく、ステレオタイプ化した民族イメージで相手を「強制了解」してしまう」〔松田 1996:213〕ことで緊張を緩和し寛容を引き出すといった他者理解の戦術が幾重にも実践されている場所でもある。そのような場で「商品化されたペルソナ」といった観光者向けの自己イメージの操作とそれ以外の多様な異質な他者に対する自己イメージの操作とがどこまで整合的に腑分けできるかは極めて難しい問題である。

そして第3に、出稼ぎ民の集住地域であるキベラは、インフォーマルな労働力供給の場であり、セルフヘルプで生活の糧を模索する人々の生活空間である。次節で詳述するように、キベラのツアーにおいて観光者と直接的にやり取りするガイドも「インフォーマルセクター」である。ガイドはキベラの住民であるがキベラ住民を代表する者ではないし、他の住民が持たない専門的知識によって文化や貧困の観光化を担う者でもない。彼らのガイドとしての実践とは、第1と第2で述べた特色をもつキベラでの住民たちの日常的な生活実践と地続きのものであると想定される。つまり、ガイドたちの観光化への対処を、自分たちの地域文化やアイデンティティをいかに見せるかといった文化観光の議論における「文化主体性論」に照らし分析することには限界がある。

次節では、以上の問いをもとに、キベラのスラムツアーの展開を概観した後に、ガイドたちの観光化への対処の諸相を検討する。

IV キベラのスラムツアー

まずナイロビ市においてスラムツアーが実施されるまでの流れを説明する。スラムツアーは、消費者である観光者と観光者を勧誘する仲介人、案内を行うガイドの三者によって実施される。筆者がこれまでの調査で把握した三者それぞれの特性や役割を説明する。

観光者の年齢層は、主に20代から50代でひとつのツアーにつき参加人数は1人から4人ほどである。観光者の出身国はイギリス、ドイツ、アメリカ、中国など多様であり、ほとんどが観光目的でケニアを訪れた人々である。

仲介人とは、空港やナイロビの市街地の安宿などの場所で観光者をツアーに勧誘し、スラムのガイドに仕事を振り分ける者たちを指す。彼らは観光者に対しては、ツアーの紹介、参加費の徴収、参加希望日の聞き取りを行い、ガイドを選定した後に、ガイドの携帯番号を観光者に伝える。またガイドに対しては、観光者を得た際に人数や参加希望日の情報を電話で伝え、ガイドの都合が合うかを確認し、条件があえば、その後の運営全てをガイドへ委託

する。こうした仲介人の多くは生活の拠点をキベラ以外に持っている。

最後にガイドとは、仲介人から仕事を受注し、観光者を実際に自分たちが暮らすスラム地域へ案内をする者たちである。

表1 ガイドのプロフィール

名前	性別	生年	居住地	出身地	開始年	ツアー数※1	主な受注先	他の職業
ライオネル	男	1985	キベラ	キベラ (ナイロビ市)	2012	15	友人	ネットカフェ
ニコラス	男	1985	キベラ	キベラ (ナイロビ市)	2005	19	観光会社(親族)	クリーニング屋、 セキュリティガード
デニス	男	1990	キベラ	キベラ (ナイロビ市)	2012	1	観光会社 (Big Time Safari)	なんでも屋
ラファエル	男	1987	キベラ	カカメガ市	2010	100以上	NGO (Busara Centre)	なんでも屋
ヴィタリス	男	1988	キベラ	キベラ (ナイロビ市)	2004	0	NGO	DJ、衣類販売

※1 ツアー数(2015年1月から10月までの10ヶ月間)

彼らがガイド業を始めたきっかけは、観光会社で働く友人や親族からのオファー／への交渉やNGOとの既存のネットワークを活かした出会いなどである。しかし毎日仕事があるわけではなく月に1回といった事態もあるため、ガイド業だけで生計を立てることは非常に困難である²。

ここで重要な点は、先に触れた通り、彼らはすべてインフォーマルな営業形態であることである。ガイド5名に聞き取り調査を行った結果、皆がガイドの仕事だけでなく複数の職を掛けもちしていることがわかった。またガイドたちはいずれも20代から30代の男性で1人を除いてキベラで生まれ育った若者であるが、全員がごく近年の2000年代後半以降にガイド業を始めていた。スラムツアーガイドのための公式な資格や免許などは無い³。このようにナイロビ市のスラムツアーのガイドを分類し特徴を検討してみると、ガイドたちは既存の人間関係や偶発的な出会いによってガイドを始めており、仕事のチャンスはスラム住民に広くひらかれているといえる。キベラのスラムツアーは、インフォーマルセクターによって実施されているためツアー数や拡大規模は不明であるが、筆者が参与観察していた2015年9月から10月の間には、2、3日に一度はスラムツアー中の姿が確認されていたため、日常的に実施されていると推定される。ここでインフォーマルセクターとして働くキベラのガイドによるスラムツアーの具体例をひとつ(2015年10月6日)紹介する。

表2 スラムツアー行程表(2015年10月6日)

時間	訪問場所	活動内容
10:00	滞在先から出発	
10:00-10:15	移動	徒歩
10:15-10:30	ボーンクラフトショップ	ガイドと合流、ショップの説明
10:30-11:10	小学校	児童と交流、教師による学校の説明
11:10-11:20	移動	徒歩
11:20-11:35	キベラリバー	川の説明
11:35-11:45	移動	徒歩
11:45-12:45	地酒酒場	地酒を飲む
12:45-13:00	移動	徒歩
13:00-13:10	ビューポイント	記念撮影
13:10-13:15	移動	徒歩
13:15-13:30	アートショップ	ショップ訪問、解散

実施時間は午前10時から午後1時半までの約3時間半であった。2名の観光者(欧州から来たバックパッカーの

20代後半男性)はナイロビ市街地からバスに乗りキベラのバス停で下車しガイドたちと合流した。ボンクラフトショップと呼ばれる牛の角を使ったアクセサリーのショップ、小学校、キベラリバー、ローカルブルーという地酒の酒場、キベラが一面に見渡せるビューポイント、キベラのアーティストたちが製作した絵画が売られるアートショップの6箇所を見学し、最後にバス停に戻って解散という行程であり、見学場所の間の移動は徒歩である。

スラムツアーはガイド自身の事情や観光者の希望によってアレンジされるため、筆者が参加した5つのツアーの内容はそれぞれ異なっているが、いずれも上述した先行研究が指摘するスラムツアーの特徴—情報技術、「貧困の商品化(貧困削減、生活環境の改善)」とスタディーツアー—の要素を組み込んでいた。「貧困の商品化」にかんしては、たとえば、以下のような事例を挙げることができる。筆者が参加した5つのツアーではいずれも小学校を訪問したが、観光者はそこで子供たちの歌による歓待を受け、貧困からの脱却における教育の重要性や学校経営の困難さにかんする話を教師から聞き、最後に学校への寄付が懇願された。また、2014年に筆者が初めてキベラを訪れ観光者としてツアーに参加した際、治安上の理由からガイドに私のカメラを預け、彼の判断で写真を撮ることになっていたが、撮られたものなかには、劣悪な生活環境であることを訴えかけるような、路上に散乱するゴミや汚物を写しただけのものが複数枚あった。また劣悪な生活環境が商品化されていることは、キベラリバーを訪問した際に「この川は今ではゴミだらけになっているがおれたちが小さい頃はきれいで泳げたんだ」という説明が、ガイドたちの決まり文句になっていたことにも示されている。このようにケニアのスラムツアーに観光者が期待する貧しいなかで学ぶ子供たちの姿や、ゴミや汚物が散乱するスラムの劣悪な生活環境が商品化されている点を見ると、観光を運営するキベラのガイドたちは、スラムツアーに沿って積極的な活動をおこなっているようにみえる。ただし何をどう見せるのかをあらかじめ決定しているようには見えない事例も多々あった。次節では、「文化主体性論」を再考しうる事例を検討する。

V スラムツアーを逸脱する

観光化に対するガイドの実践を論じる前に、先行研究が述べるような観光化や観光者に身構えるように主体的に文化を創造する「文化主体性論」に対して疑問を抱くきっかけとなった事例を紹介する。

事例1 (2015年9月15日)

キベラに来て4日目。スラム生活の大まかなリズムを掴み始めていた私は、ツアーへの参与観察や情報収集を開始したいと考えていた。そこで私の保護者でありスラムツアーのガイドでもあるライオネルに協力を依頼するために、バーに出かける身支度をする彼に自分の研究の話 시작했다。自分がスラムツアーを対象に研究していること、現在はガイドに着目していること、など鏡の前の彼に向かって一方的に話をした。より理解をしてもらおうと先行研究である一冊の学術書をかばんから取り出し、タイトルを読み上げた。“Slum Tourism in Kibera, Nairobi, Kenya Philanthropic Travel or Organised Exploitation of Poverty?”すると身体にディスプレイをふりかけようとしていた彼は一度その動作を止め、本を自分の手に取った。彼は、「慈善…貧困の搾取…? ショックだ…」と漏らした。スラムツアーが貧困ツアーであるとした捉え方やスラムツアーの倫理性をめぐる議論の存在をこの場で初めて知った様子の彼は、しばらく困惑していた。私が追い討ちをかけるようにマスメディアによる批判も多いことを告げると、部屋のなかには重たい沈黙が流れ、2分前までの浮かれ気分は一瞬のうちに引いてしまった。空気の悪さを感じた私は、「いや…でも、昨年観光者として参加した君のツアーは純粋にとっても楽しかった」と慌てて彼に伝えると、「そうだろう?」とすこし自信を取り戻した様子で答えた。その後すぐに表情を明るくさせた彼は、楽しそうに外出用の靴を選び始めた。

この事例で注目したいのは、ガイドのライオネルはスラムツアーが貧困を見世物とした観光であり、それに対する批判の存在を認識してこなかった(という態度をとった)ことである。この事例だけで定かなことを示すには至

らないが、ライオネルと一緒に生活するなかで彼が「ショックを受けた」ことは意図的な自己呈示ではなく、本当に知らなかったと理解するようになった。その理由の一つは、彼らのガイド「である」状態と関係している。キベラのスラムツアーは、他の職種のインフォーマルセクターと同様に参入・退出が激しく、個人操業のガイドが仲介人からの不定期のあっせんを受け、断続的な状態でツアーを運営していたり、生計手段の一つの機会として模索を繰り返している状態にある。たとえば、筆者が参加したキベラ住民の経営者1名による従業員1名のスラムツアーでは、参加前には確認できた会社のHPが、後日再度確認すると消されており、ごく短期間の営業をしていた可能性があった。また先に触れたように、キベラのガイドは必ずしもガイド業に専門化・専門化しておらず、多様な仕事の一つとしてガイドに携わっている。自身を「何でも屋」だというガイドたちにとっては、観光者の期待について綿密な情報収集をして、その期待を明確化・固定化し、それに対する戦略を練り文化を創造するよりも、その他の様々な生計手段を模索するために時間を割くことのほうが重要であるかもしれない。

実際に、以下の事例で述べるように、キベラのツアーでは先行研究が指摘するような「貧困の商品化」にそぐわない事態も多々見られる。

事例2 (2014年8月23日)

初めて観光者としてキベラのツアーに参加した際、NGO団体の事務所に向かってガイドのライオネルと（旅行会社の仲介人とともに）路地を歩いていると、ふと彼がとある家の前で立ち止まり「サッカーのテレビゲームをしたいか？」と尋ねてきた。いざ家のなかに入ると、すでに6人の子供たちがテレビと「プレイステーション3」を囲んで遊んでいた。日本でも人気のサッカーゲームがキベラにもあるのか、と私は驚いた。私も1試合だけプレイをして、子供たちとの時間を楽しんだ。ゲーム終了後、ライオネルの指示通りチップを置きその場を後にした。

調査後の聞き取りによると、ガイドがゲームに誘ったのは、当時は純粋な観光者であった私だけであった。誘われた理由は定かではないが、少なくともプレイステーション3でのゲームは観光者が一般的に想像する貧困のイメージからは逸脱したもののようにみえる。この事例では、先に提示した学校とは異なり、子どもたちやライオネルはゲームと貧困や生活苦を結びつける説明や態度を提示することはなかった。すなわち、ガイドたちはある種の観光者像を意識した上で何をどう見せるのかをおおよそ決めてはいるものの、どの場所にどれほどの時間で案内するかを観光者だけでなく、ガイドの個人的な事情によってもアレンジし、柔軟に選択しているのである。事例をもう一つ示したい。

事例3 (2015年10月6日)

午前9時過ぎにガイドのデニスから私の同居人であるライオネルに「ツアーの仕事が入ったけどヤギは来るのか」との電話が入った（仕事を手に入れたときは連絡してほしいとデニスに依頼していた）。ツアーには私と共にガイドのライオネルとニコラスも同行することになった。観光者は欧州からきた20代男性2人組。待ち遠しかった他のガイドによるツアーへの同行のチャンスに私の胸は高まり、デニスと観光者たちが行動する様子を後方からビデオカメラを持ち熱心に撮影していた。しかし本来ここにいるはずのなかったふたり（ライオネルとニコラス）がずっと観光者と楽しそうに話をしている。「彼らがいては、本当のツアーが見えてこない」といらいらを隠せ（さ）ない私の姿など、彼らは気にもとめず、デニスを差し置きニコラスがガイドをし始めたりもした。デニスもデニスである。なぜなら最後のアートショップでもデニスは完全にニコラスに仕事を任せ、ライオネルとふたりでツアーに関係しない話をし、何か別の事柄にかんする金銭の交渉を始めたからだ。この頃には私もこのような「いい加減」なツアーの様子を面白い気持ちになり、ライオネルとデニスが交渉しあう姿を撮っていた。しばらくして私の存在に気付いたライオネルははっとした表情を見せ、なんともいえない苦笑いを見せた。

この事例は、他のガイドのツアーに参加した私の友人のガイドたちが勝手に案内を始めた話である。この他にも、

ツアーの際中にはガイドの仕事とは関係のない電話が頻繁にかかってきたり、彼らの私的な用事にあわせてどのルートを通るかを決定していると疑われる事態があった。つまり、ガイドたちは必ずしも観光者の期待に添うようにツアーを運営しているのではなく、その時々思いつきや、彼ら自身の興味や私的な都合に観光客をつきあわせることがある。

アフリカの都市インフォーマルセクター研究では、問題に対峙しながら生きる人々が、必ずしも対処や解決を目指して計画的に行動しているわけではなく、その場をいかに乗り切るかといったことに焦点をあてた生き方をしていることが明らかにされてきた〔小川 1998; 小川 2016〕。たとえば、小川了は、レヴィ＝ストロースが『野生の思考』（1976）で提示した「プリコラーージュ」と比較しながら、「自分がよって立つ立場さえも臨機応変に変えつつ、切り抜けに切り抜けて重ねて生きていく」戦術として「デブレイヤージュ (débrouillage)」という概念を提示している（小川 1998: 271）。一方、小川さやかはタンザニアにおいて窮地に陥った他者の滑稽な／惨めな姿を高らかに笑うことになぜ道徳的な禁忌が生じないのかを考察した論文において、「キャラ」（社会的人格）と「素顔」とを適切に管理、操作する近代的なセルフ観は、タンザニアでは普遍的ではないと指摘する。むしろデブレイヤージュを重ねて生きているタンザニア都市住民の生活世界は、次々と訪れる難局を切り抜けていく即興的な実践に伴って絶え間なく変身（メタモルフォーシス）し続ける、述語の世界〔坂部 2009〕であり、そこでは「素顔」も「キャラ」のいずれも、そもそも問題にされていないと論じている〔小川 2016: 101〕。

上の2つの研究が示すように、窮地に立つアフリカの人々にとっては、自分の立場を固定化するといった状況も、または自分の中心に唯一無二の「素顔」や「人格」があり、その外側に表面的な「キャラ」や「仮面」があるといった二項対立のセルフ観も、決して普遍的ではない。人々はただその場の「行為」に重きを置き、臨機応変に変身し続けるようである。これらの研究によって浮かびあがるキベラの人々の姿があるとすれば、それは「商品化されたペルソナ」のように「観光者用の一貫したキャラ／仮面」によって、それとは異なる「本当の私」「本来の文化」を保持する人々ではないのではないだろうか。インフォーマルセクターでツアーを営むガイドたちは、複数抱える仕事のひとつとして勤めるガイドに自分の「人格」を代表させてはいない。彼らには観光者に対する「仮面」や「文化」を練り上げるインセンティブは存在しない。彼らは、スラムツアーや観光者を、異質な他者が流動的に行きかうキベラという場所における日常的な生活実践のひとつに並列的に組み込むことで、観光現象そのものがもつ力を中和しているようにも思われるのである。

VI おわりに

本稿ではスラムツーリズムにおけるスラム住民の実践を論じるために、ガイドの観光とのかかわり方について明らかにしてきた。ここで本論文の問題意識に立ち戻り、「文化主体性論」をめぐる議論について再考したい。

従来の観光人類学では観光に内在する観光者と観光地の人々の不均衡な力関係に対して、主体的に文化を創造するといった抵抗実践による「文化主体性論」に注目してきた。まず前段階として山下晋司が観光化によって生まれる「クレオール文化」を肯定的に説明した。太田好信は不均衡な関係性のなかでホストがかろうじてなしうる「抵抗」実践を捉えようとした。バンテンの「商品化されたペルソナ」論は、より戦略的に観光地の人々が生活世界の観光化に備えて行う実践としてみることができると述べている。

しかし、従来研究が示してきたこのような観光地の人々の主体的な実践、戦略性を強調することは、逆に観光化や観光者との遭遇を一大事として特権化することにもなる。ケニアのガイドたちにとって観光ガイドは数ある仕事のひとつでしかなく、観光者への案内はそれ以外の日常的な雑務や日常で起きる出来事に合わせて行うようなものである。ガイド業が数ある仕事のひとつ、不定期に従事する仕事のひとつに過ぎないことは、観光者に対応するための特別な「ペルソナ」や「文化」を練り上げるインセンティブを彼らにもたらさない。さらに参入・退出の自由があることは、彼らに観光者に対する強い批判や固定的な期待を抱かせることにはならない。

ガイドたちのペルソナとは、固定的な観光者イメージに即して普段の私とは異なる仮面として、あらかじめ設定したものというよりその時々偶発的な状況、その時々に対面する相手に応じて常に自在に変化していく一つではない。むしろ彼らの観光化をめぐる対処のしかたというのは、観光や観光者をそれ以外の日常的な出来事、様々

な日常の関係の一つに並列的に付けたすという対応をすることで、豊かな観光者や彼らとの遭遇を「なんでもないこと」にしてしまうことにあるように思われる。文化人類学者の久保忠行は、従来の観光人類学は調査対象を観光の現場に閉じ込めることで、実践にかんする理解の幅を矮小化し、文化の「本質」に迫れなくなったと批判する〔久保 2014〕。久保はホストが観光以外の選択肢をもつ可能性を示しながら、「観光を生活環境の一部としてみるような広い視野が必要である」〔久保 2014：295〕と説明するが、本論文で明らかにしたガイドたちの実践は、こうした視野に立つ必要性をより顕著に示している。

観光者とスラム住民との関係から新植民地主義的な関係性を鋭く読み取り、途上国での観光を覆う経済的なパワーバランスや不均衡な関係性の存在を自省的に意識する倫理性は、そうした不均衡の上で観光現象の調査をして民族誌を書く研究者には確かに求められる。だが、その倫理的な問いをそのままスラム住民に問いかけし、その倫理性を基準として彼らの実践をまなざすことが、逆説的にも、われわれと彼らの関係を「不均衡な権力関係」で規定する視座を強化することにもなることには、より慎重にならなくてはならないと考えられる。

注

- 1 スラムツーリズムの議論をわかりやすく示すものには、たとえば、The New York Times による「Slum Visits: Tourism or Voyeurism?」(2008年3月9日に提示したデータ〈<http://www.nytimes.com/2008/03/09/travel/09heads.html>〉2016年12月10日閲覧)やBBCによる「slum tourism: Patronising or social enlightenment?」(2012年9月24日に提示したデータ〈<http://www.bbc.com/news/business-19546792>〉2016年12月10日閲覧)、ケニア国内の主要メディア、デイリー・ネイションのオンラインによる「POORISM: Genuine celeb charity or shock value?」(2016年8月13日に提示したデータ)〈<http://www.nation.co.ke/lifestyle/buzz/POORISM-Genuine-celeb-charity-or-shock-value/441236-3343612-10ckxu0z/>〉2016年12月10日閲覧)など、がある。
- 2 観光者が支払う参加費はおおよそKsh.2500(約2900円、2015年10月時点)であり、ガイドはこの費用を仲介人と折半するのでその半分のKsh.1250(約1500円)を手取りとして得ることができる。ナイロビの「一般労働者」の月の最低賃金が約11000kshである(日本貿易振興機構(ジェトロ)が2016年5月13日に提示したデータ〈<https://www.jetro.go.jp/biznews/2016/05/a867b17ad7191325.html>〉2016年9月7日閲覧)ことを踏まえると彼らにとってガイド業は比較的良好な収入であると考えられる。
- 3 ケニアの公用語はスワヒリ語であるが、1963年までイギリスの植民地であったために人々の間では広く英語が使われており、皆が流暢な英語で案内ができる。

参考文献

アーリ、ジョン

1995 『観光のまなざし—現代社会におけるレジャーと旅行』加太宏邦訳、法政大学出版局。

アーリ、ジョン・ラースン、ヨーナス

2014 『観光のまなざし(増補改訂版)』加太宏邦訳、法政大学出版局。

江口 信清

2011 「観光の文化人類学研究」『観光研究リファレンスデータベース』江口信清・藤巻正己(編)、pp.62-70、ナカニシヤ出版。

太田 好信

2010 『トランスポジションの思想—文化人類学の再想像(増補版)』世界思想社。

小川 さやか

2016 「笑いにあふれた世界と窮地—タンザニアの零細商人を事例として—」『立命館言語文化研究』27(4):87-102。

小川 了

1998 『可能性としての国家誌—現代アフリカ国家の人と宗教』世界思想社。

久保 忠行

2014 「タイのカヤン観光の成立と変遷—観光人類学の枠組みを再考する—」『東南アジア研究』51(2):267-296。

慶田 勝彦

2012 「キベラ・レッシン—ケニアにおける土着性とヌビのアイデンティティ」『政治的アイデンティティの人類学—21世紀の権力変容と民主化にむけて』太田好信(編)、pp.78-103、昭和堂。

古村 学

2007 「観光研究と社会：東アフリカを中心として」『年報人間科学』28：1-17。

坂部 恵

2009 『仮面の解釈学（新装版）』東京大学出版会。

須永 和博

2012 『エコツーリズムの民族誌—北タイ山地民カレンの生活世界』春風社。

2016 「他者化に抗する観光実践——釜ヶ崎のまちスタディ・ツアーを事例として」『観光学評論』4（1）：57-69。

高寺 奎一郎

2004 『貧困克服のためのツーリズム Pro-Pour Tourism』古今書院。

内藤 順子

2015 「第7章 スラム観光をめぐる感情的葛藤のフィールドノート—チリ・サンチャゴ市の実践から」『実践と感情—開発人類学の新展開』関根久雄（編）、pp.195-218、春風社。

橋本 和也

2011 『観光経験の人類学—みやげものとガイドの「ものがたり」をめぐる』世界思想社。

松田 素二

1996 『都市を飼い慣らす—アフリカの都市人類学』河出書房新社。

1999 『抵抗する都市』岩波書店。

2016 「第7章 紛争予防のための潜在力—現代ケニアのコミュニティ・ボリングの事例から」『紛争をおさめる文化—不完全性とブリコラージュの実践』松田素二・平野（野元）美佐（編）、pp.237-275、京都大学学術出版会。

松田 素二（編）

2014 『アフリカ社会を学ぶ人のために』世界思想社。

森本 泉

2012 『ネパールにおけるツーリズム空間の創出—カトマンドゥから描く地域像』古今書院。

山下 晋司

1999 『バリ 観光人類学のレッスン』東京大学出版会。

Bunten, A.

2008 Sharing Culture or Selling out? : Developing the Commodified Persona in The Heritage, Industry, *American Ethnologist*, 35. (3) :380-395.

Frenzel, F.

2012 Beyond 'Other' The Political Roots of Slum Tourism In. Frenzel, F., K. Koens and M. Steinbrink (eds.) *Slum Tourism : Poverty, Power and Ethics*. New York: Routledge. pp.49-65.

Nash, D.

1989 Tourism as a Form of Imperialism. Smith, V. L. (ed.) *Hosts and guests: The Anthropology of Tourism*. University of Pennsylvania Press. pp.37-52. (『観光・リゾート開発の人類学—ホスト & ゲスト論でみる地域文化の対応』三村浩史監訳、勁草書房) (1991)

Smith, V.

1989 *Hosts and Guests: The Anthropology of Tourism*. University of Pennsylvania Press. (『観光・リゾート開発の人類学—ホスト & ゲスト論でみる地域文化の対応』三村浩史監訳、勁草書房) (1991)

Steinbrink, M., F., Frenzel and K. Koens

2012 Development and Globalization of A New Trend in Tourism In Frenzel, F., K. Koens and M. Steinbrink (eds.) *Slum Tourism : Poverty, Power and Ethics*. New York: Routledge. pp.1-18.

Revisiting the Theory on People's Independence toward Tourism of their Own Culture: A Case of Slum Tourism in Nairobi, Kenya

YAGI Tosuke

Abstract:

Several researches in tourism anthropology have regarded people in the venue as the creators of tourism culture who demonstrate the people's resistance by making their residential area into tourist attractions. This paper questions this image of people working in the tourism industry as the creator of tourism culture, and in order to reconsider this existing theory, this paper focuses on the actual practice of the slum inhabitants who work as slum tour guides in Nairobi. The result finds that slum tour guide is only one of many jobs for them in the informal sector. Tour guides respond to some of the expectations of tourists, but rather flexibly make their tour plans based on their daily chores during the tour. Considering the discussions in previous research on the informal sector in urban Africa, the paper demonstrates the slum tourism as a casual daily business for the host and suggests a danger of regarding their practices only in the context of the imbalanced relationship between developed countries and developing countries including tourism.

Keywords: slum tourism, anthropology of tourism, the creator of tourism culture, tour guide, informal sector

「文化主体性論」の再考

——ケニア・ナイロビ市におけるスラムツーリズムの展開を事例に——

八 木 達 祐

要旨：

従来の観光人類学では、観光地化に対する観光地の人々の対処は、不均衡な力関係を内包する観光に対する人々の主体的な文化の創造の在り方として示されてきた。しかし本論では、不均衡な関係性という強固な前提のもとで示される「文化主体性論」が彼らの実践への理解を狭めうる危険性があることを指摘する。本論文はケニア・ナイロビ市のスラムツアーを事例に、ガイドとして働くスラム住民の実践に着目する。まず現地調査の結果から、彼らがインフォーマルセクターであること、また彼らのツアー運営は観光客の期待を取り込むがそれに合わせて緻密に戦略を練るものでなく他の雑務や出来事にあわせて柔軟に実施されるものであること、を明らかにする。以上をアフリカ都市のインフォーマルセクター研究の議論を踏まえて検討し、人々の戦略を強調することが逆説的に彼らの観光化への対処を「不均衡な権力関係」で規定してしまう危険性をもつことを指摘する。